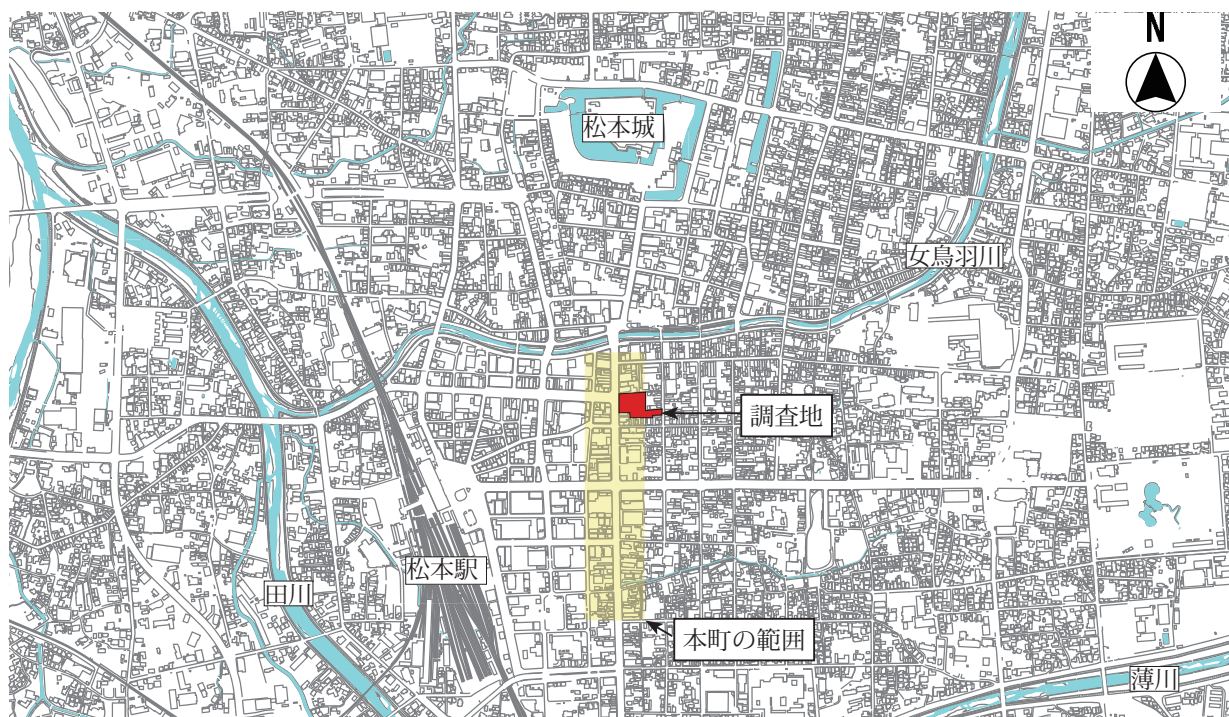
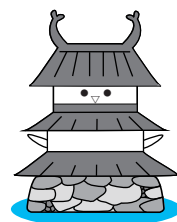


1 調査の概要

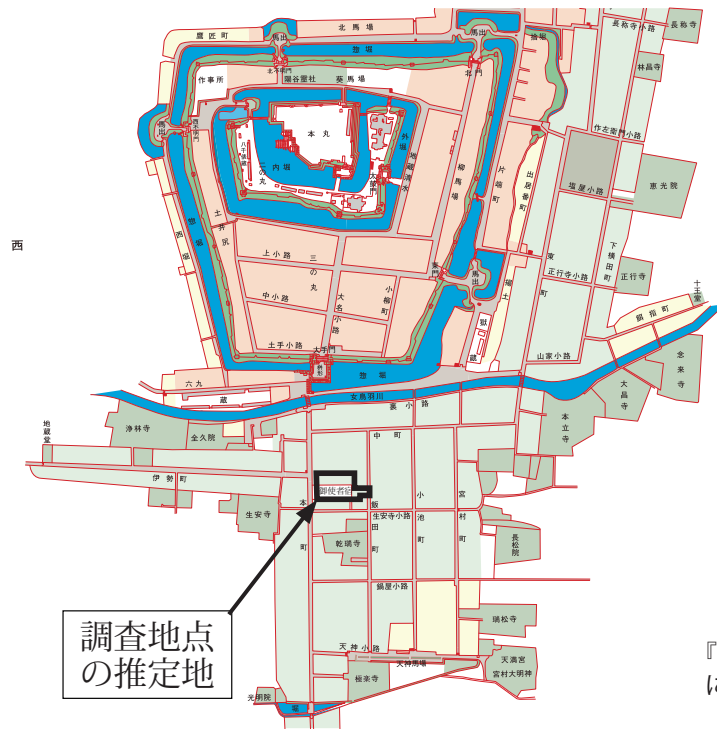
- (1) 調査地 : 松本市中央2丁目
- (2) 調査原因: 信濃毎日新聞社松本本社社屋移転新築事業
- (3) 調査期間: 平成27年8月3日～平成28年9月13日
- (4) 調査面積: のべ4177㎡ (第1～5検出面の合計)
- (5) 主な遺構: 礎石立建物、布掘り建物、敷地境遺構、水道施設遺構、石組みカマド跡、埋設桶、杭列を伴う溝状遺構、ごみ穴跡、
- (6) 主な遺物: 陶磁器 (美濃焼の茶道具や雑器、肥前焼の食器、^{きょうやき}京焼の仏具など)
土器 (カワラケ、灯明皿、内耳土器など)、木製品 (^{げ た}下駄、^{おけ}桶、^{はし}箸、荷札など)
その他 (銅銭、煙管、砥石、基石、骨、貝殻、木の実など)



調査地の位置図

2 遺跡の概要

本調査地が位置する本町は、松本城下町の町人地です。松本城下町は、善光寺街道沿いに造られた^{ほんまち}本町・^{なかまち}中町・^{ひがしまち}東町のいわゆる親町3町を軸に形成され、さらにその親町から^{えだまち}10町の枝町が伸びています。このうち本町は、内外の流通拠点として様々な品物を扱う問屋などの大店が集中し、商人町の様相を呈していました。本町の起源については、享保10年(1725)に編纂された^{しんぶとうき}『信府統記』に、「前略・・・天正13年(1585)より今の宿城地割して、同15年までに、市辻・泥町辺の町屋残らず本町へ引移し・・・後略」と記載されており、16世紀末の松本城以前の^{ふかしじょう}深志城時代に^{おがさわらさだよし}小笠原貞慶によって本町の町割りが行われたものと推定できます。



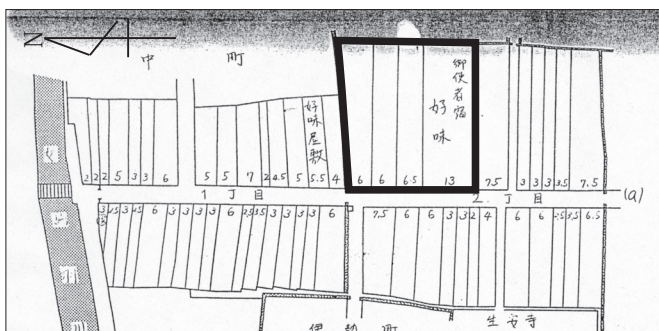
『享保十三年秋改松本城下絵図』
による城と城下町の復元図

3 調査地点について

今回の調査地については、古絵図をみると、調査地北半に数件の町屋、南半に間口の広い今井家（その前は今橋家）の屋敷兼御使者宿があったことがわかります。

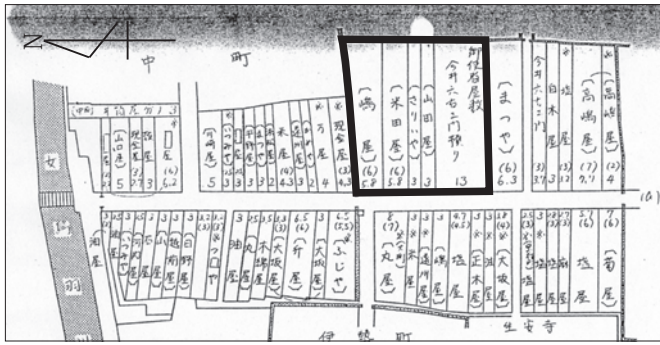
今井家は、町役人の最高位の一人に任命され、町役人である倉科家とともに城下町の統制にあたりました。酒庄屋、穀物商、貸家業など手広く商売をするかたわら、城への客や公用で来た者を接待し、御用飛脚などを宿泊させる「御使者宿」という藩の施設おししやどを運営していました。

御使者宿は、身分の高い人が宿泊する場合にも差支えないだけの立派なものであり、城の細工師によってつくられた内部は、まるで御殿と同じ作りになっていた言われています。当初、親町3町が当番制で御使者宿を運営していましたが、寛文7年（1667）以降は常設の施設が設けられました。延宝7年（1679）までの6年間を今橋家が運営し、その後は、今井家が明治初年まで一切の責任を負っていくことになります。また、天明3年（1783）には、御使者宿が調査地のある旧本町2丁目から旧本町4丁目（今井家所有の土地・現深志2丁目）に移転されました。



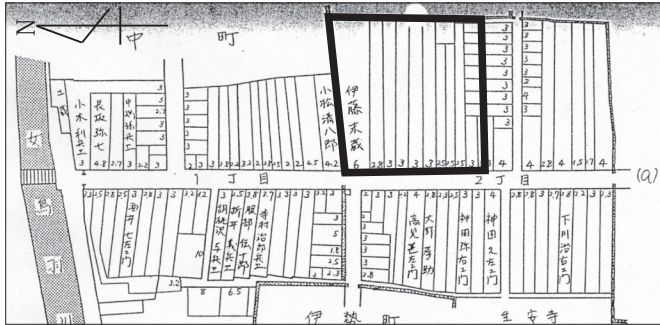
寛文9年（1669）の調査地の推定位置

調査地の推定位置南部に間口13間の御使者宿が見えます。運営者は（今橋）好味です。



享保9年（1724）の調査地の推定位置

御使者宿の運営者が今井六右衛門に変わります。北側には、嶋屋や米田屋などの間屋が連なります。



幕末期（1845年頃）の調査地の推定位置

御使者宿がなくなり（天明3年（1783）に旧本町4丁目に移動）、間口の狭い町屋が連なります。

中藤淳 1986 「近世松本城下町における変遷過程」より引用（一部加筆）

4 調査成果

（1）戦国時代末から江戸時代の造成工事の跡

- 城下町では、火災や水害などで一帯の建物が被害を受ける度に整地をして新たな建物を建てたため、結果としてその土地がかさ上げされてきました。
- 過去の調査により、戦国時代末から近代までに最大320cmの盛り土（10回以上の整地）が行われてきたことがわかっています。
- 理由は判然としませんが、本町以外の町では1.5m～2.0mしか盛土をしていません。



現代の^{かくらん}攪乱層

第1検出面（18世紀後半～19世紀初頭の地面）

第2検出面（17世紀後半～18世紀前半の地面）

第3検出面（17世紀初頭の盛土）

第4検出面（16世紀末の地面）

自然に堆積した層（女鳥羽川の洪水による堆積）

土層の様子

(2) 城下町成立から発展の変遷

★ 文献資料から（信府統記より）

- ・ 城下町は、天正13～15年（1585～1587）に小笠原貞慶によって成立しました。
- ・ 初代松本城主石川氏から水野氏に至るまで、城下町が発展していきました。

★ 今回の発掘調査から

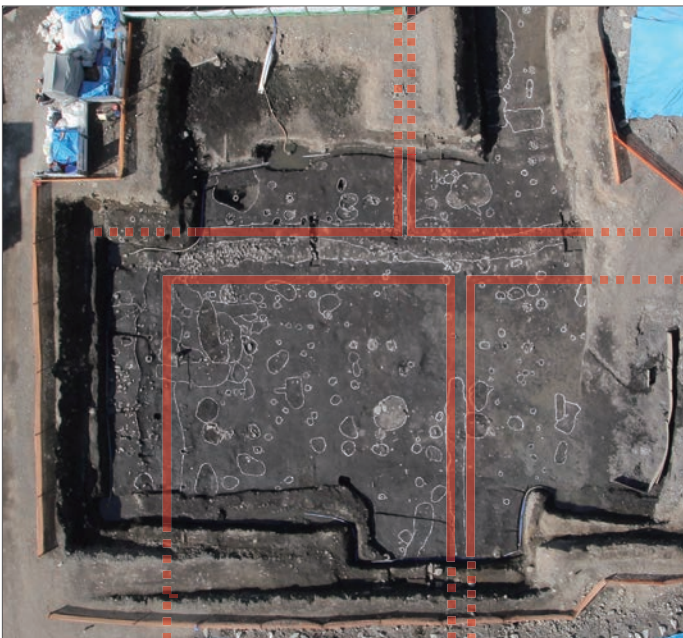
- ・ 小笠原貞慶の頃の本町は、中世によく見られる方形区画の屋敷割りを採用しています。



- ・ 石川氏・小笠原氏の頃に、中世的な屋敷割りを完全に覆い隠すように、大規模に盛土を行っています。



- ・ 水野氏（1642年～）の時代までに、近世的な短冊形の屋敷割りを完成させています。



小笠原貞慶期の方形の屋敷割り。（上が北）



石川氏・水野氏期の盛土の様子。（右下が北）
※遺構はほとんど見られず、盛土作業中に行ったと思われる焚火の跡が数か所見つかりました。



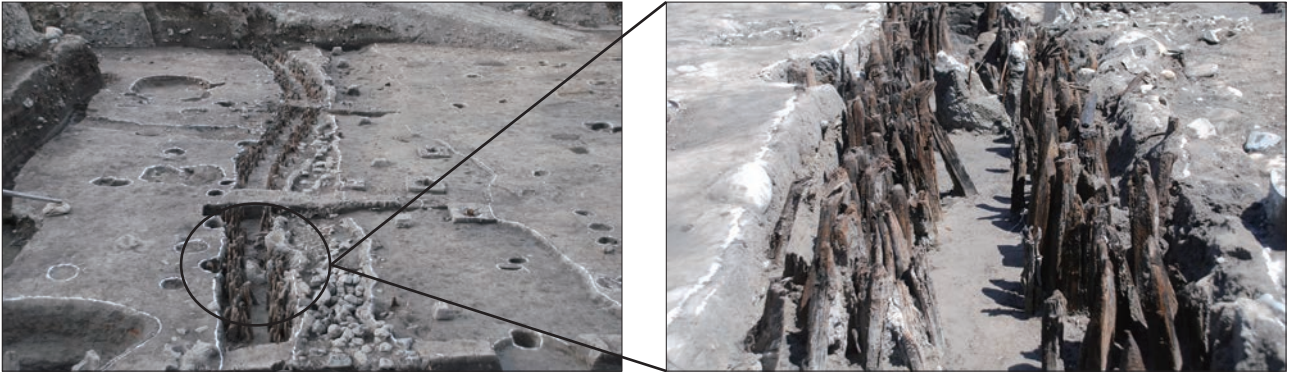
近世の町屋敷のイメージ図
（松本城下町跡伊勢町第1次発掘調査
報告書より）



水野氏以降の屋敷割り。（左が北） ※赤線 = 建物跡

(3) 城下町成立期の地層から杭列伴う溝を発見

- 全長は30m以上（両端は調査区外に延びているため不明）あります。
- 先端の尖った杭が1,000本以上検出されました。
- 溝の性格はよくわかっていません。



蛇行するように杭列を伴う溝が延びる

(4) 隣地境界の跡

これまでの城下町の発掘調査の中で一番広い面積を調査しました。その結果、町人屋敷を数軒分調査することができ、屋敷境の様子がよくわかりました。

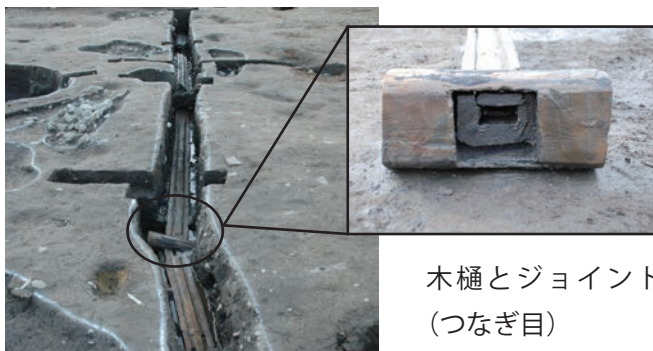


石列と胴木を伴う塀の基礎

塀の基礎より左側（南側）は御使者宿の敷地と推定される

(5) 江戸時代の水道施設跡

- 松本城周辺は、元来湿地性の環境であるため、木製品が非常に良好な状態で残っていることが多いです。
- 松本城下町で水道管の設置は、16世紀中頃から始まると考えられています。（水道管ができる前は、要所に設置した井戸まで水を汲みに行きました。）
- 水道管は2種類確認できました。木を削り貫いて作った「木樋」^{もくひ}と竹の節を抜いて作った「竹管」^{たけかん}があります。



木樋とジョイント
(つなぎ目)



竹管と枅（方向を変えるためのもの）

(6) 御使者宿の推定位置

- ・礎石立ちの建物を確認しました。 → 町人地では布掘り建物や掘立柱建物が一般的です。
- ・飛石を確認しました。 → 日本庭園があったと想定できます。
- ・高価な茶器が見つかりました。 → 文化的教養の高さや財政的なゆとりがうかがえます。
- ・高級食材・焼塩壺が見つかりました。 → 高貴な客人を接待していたと考えられます。



発見された遺構・遺物から、御使者宿である可能性が高いです。



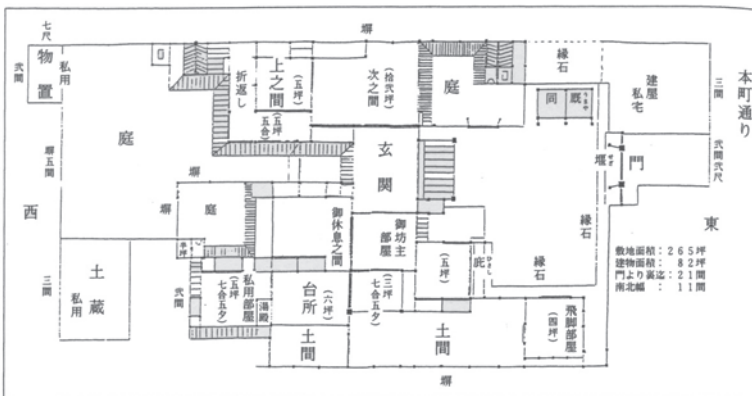
推定御使者宿内の礎石建物（赤線・青線・黄線）と水道施設
遺構（緑線）（上が北）



推定御使者宿内の庭園跡

しのだき
志野焼の酒器

やきしおつぼ
焼塩壺（精製塩を生産した容器で、そのまま食膳で用いられました。高い階層に好まれました。）

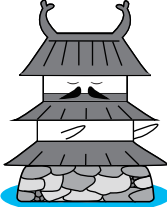


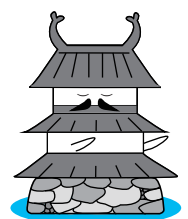
「御使者宿」の間取り。(郷土出版「よみがえる城下町」から引用)

天明3年(1783年)に、発掘調査の場所(中央2丁目)から深志2丁目に移転しました。この図は、移転後のものです。

5 まとめ

今回の発掘調査での主な成果は以下のとおりです。

- ・ 戦国時代末～江戸時代後半までの遺構・遺物を確認しました。
 - ・ 小笠原貞慶期の城下町成立（16世紀末）から石川氏・小笠原氏期（17世紀初頭）の城下町発展の変遷がわかりました。
 - ・ 城下町成立期の地層から、全国的にも珍しい杭列を伴う溝を発見しました。
 - ・ 町人屋敷の隣地境界の様子がわかりました。
 - ・ 遺存状態の良好な水道施設遺構が見つかりました。
 - ・ 御使者宿に帰属すると考えられる遺構・遺物を確認しました。
- 



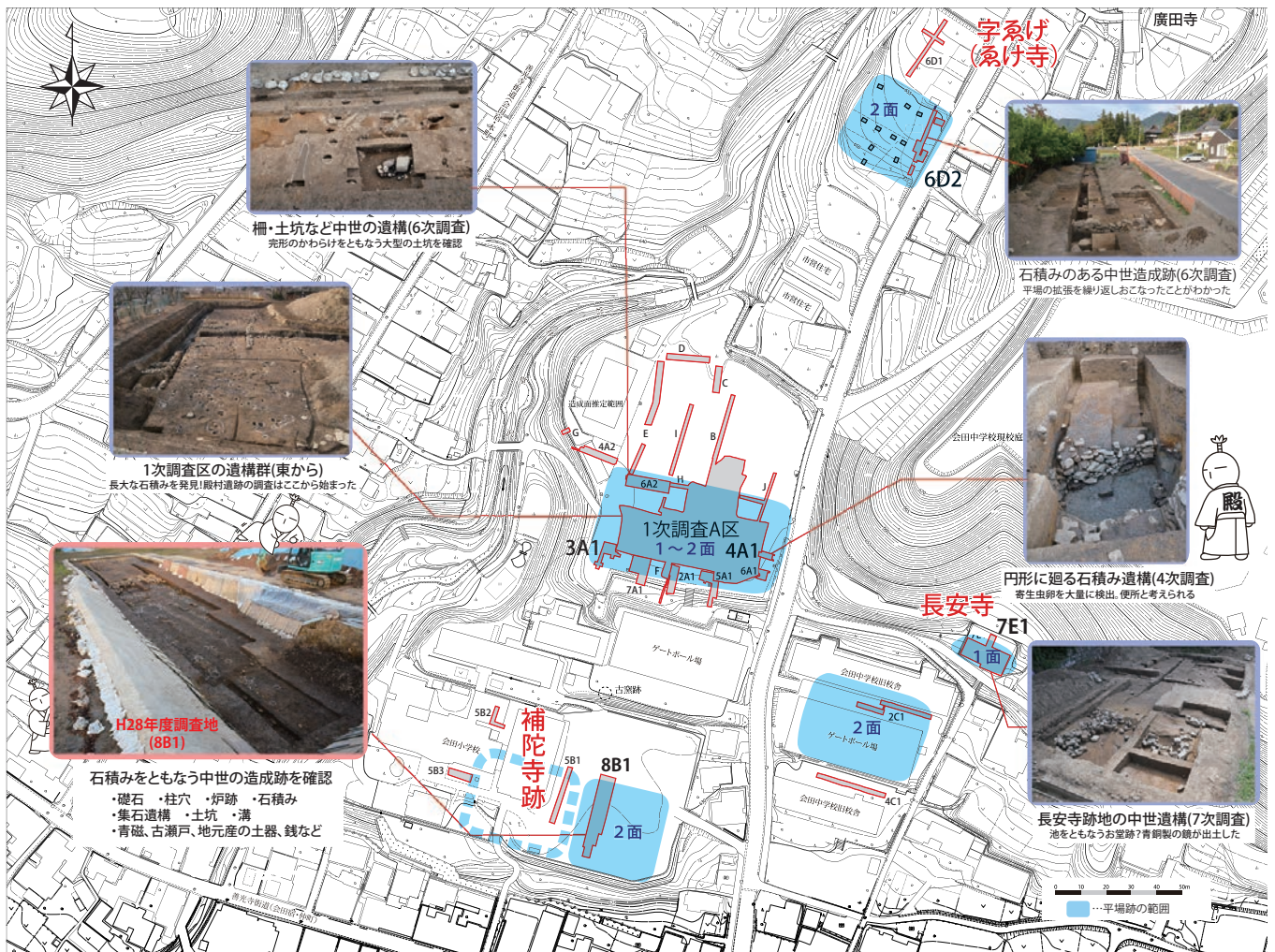
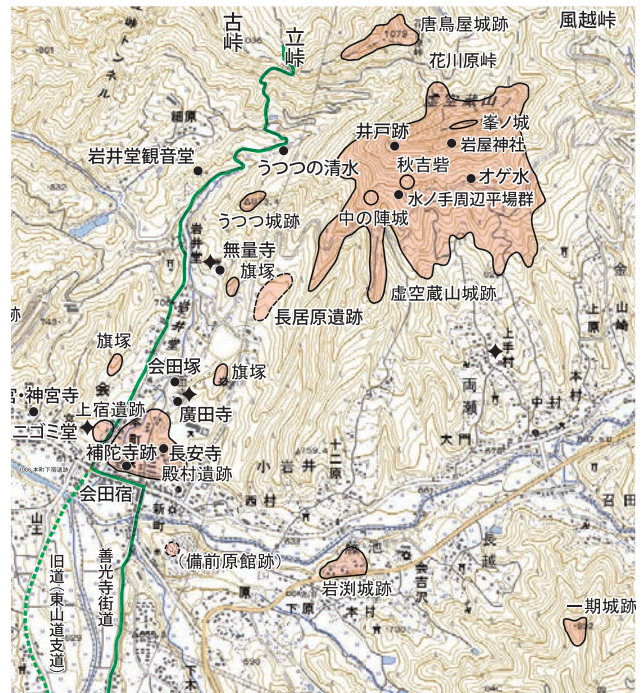
殿村遺跡と虚空蔵山城跡の発掘調査

はじめに

- 1 300 m四方に及ぶ宗教施設群「殿村遺跡」
平場の造成と石垣／礎石建物と池／輸入
陶磁器と茶道具／やきものの主役＝かわら
け／硯と文字／信仰資料
- 2 山の寺から山城へ「虚空蔵山城跡」
聖地と城／谷間の平場群が語るもの／古
段階＝「寺」から新段階＝「城」へ
- 3 遺跡と史料が語る虚空蔵山麓の宗教空間
山の寺と里の寺／虚空蔵山を頂点とした
信仰世界をイメージする／殿村遺跡と中世
の石垣技術

おわりに

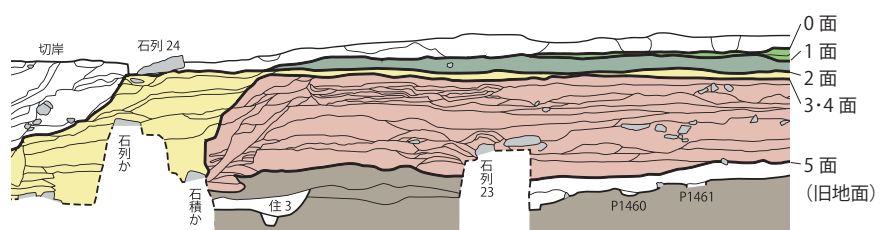
<遺跡の位置>



<殿村遺跡全体図>



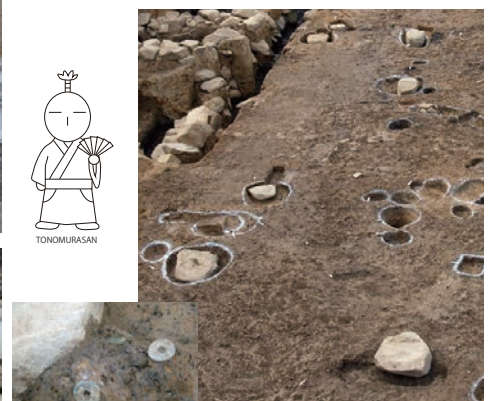
＜姿を現した殿村遺跡の平場跡＞



＜平場の盛土と繰り返される造成の痕跡（3A1）＞



＜平場や遺構を縁取る石垣＞



礎石建物と地鎮の埋納銭

＜平場上のさまざまな遺構＞